

第 8 回 市民参加懇談会コアメンバー会議
- 市民参加による政策検討会議 -
議事録

1. 日 時：平成 15 年 2 月 28 日（金） 14：00～16：10
2. 場 所：中央合同庁舎第 4 号館 6 階 共用 643 会議室
3. 出席者：木元座長（原子力委員）、碧海委員、井上委員、小川委員、中村委員、
松田委員、吉岡委員
（原子力委員会）竹内委員
（内 閣 府）大熊政策統括官、永松審議官、榊原参事官、渡辺補佐、
犬塚補佐
4. 議 題：（ 1 ）「市民参加懇談会」の開催について
（ 2 ）これまでの活動からの整理について
（ 3 ）その他
5. 配布資料
資料市懇第 8-1 号 「市民参加懇談会 in 青森」開催計画（案）
資料市懇第 8-2 号 これまでの活動からの整理について
資料市懇第 8-3 号 第 7 回市民参加懇談会コアメンバー会議議事録

6. 審議事項

（ 1 ）「市民参加懇談会」の開催について

事務局より、資料市懇第 8-1 号について説明。

（木元座長）

- ・ 前回の市民参加懇談会 in 東京（第 2 回）と同様に、今回もまず最初に座長報告として、淡々と時系列的に事実のみをお知らせする。きちんと報道されたものを元に作成する。
- ・ 第 1 部は、前回同様だが、パネリストの 3 人に、そこで何がどうだったのかということも議論していただく。
- ・ 今回は青森で開催するが、MOX 装荷の延期、住民投票、「もんじゅ」判決等があり、そういうことを踏まえると、青森で開催する意味があるのではないかと。
- ・ 2 月 20 日に六ヶ所村に行ったが、そのときにも、今回の「市民参加懇談会 in 青森」に対して、大変期待されているのを感じた。青森市で開催させていただくことで、青森県全体から注目されるのではないかとのお話もあった。
- ・ 第 2 部では、核燃料サイクルの諸問題について、住民の方々のご意見を重点的にお聞きする。第 2 部は住民の皆様、参加した方々が主役である。第 1 部では問題提起し、第 2 部ではいらした方々に手を挙げていただき、お声をまず広く伺って、その上で討議できるものをどんどん討議していく。2 時間たっぷり使いたい。そういう形式で進行するということに大変期待されていると思う。
- ・ 新聞広告としては、これまでに地元 3 紙「東奥日報」「デーリー東北」「むつ新報」に、開催のお知らせとお申し込み方法について載せた。そこには、どのようにやるかということまでは書いていない。本日はそのところを詰めさせていただき

たい。

- ・ 会場は、前回同様、階段式で椅子が配置されており、雰囲気も同様になる。おもしろいのは、開催会場の名称に「カダール」とあるが、何語だと思ふか。事務局でも頭をひねって考えたが、分からなかった。実は青森弁であるとのこと。「お話をしよう」、つまり「語る」。それが青森弁で言うと「かだる」と。それが「カダール」になったとのことである。「カダール」が入っているビルの名称「アウガ」も、青森弁の「会うが」。「会う」ということから、とのことである。
- ・ 第1部で問題提起をして、第2部はいただいたご意見をもとに展開していくという新しい、今までやったことのない前回の手法が注目されており、大変うれしい限りである。我々がここで一生懸命討論した成果が出てきている。エネルギーをどうとらえていくかということに関して、民衆、国民がどういうレベルでどういう参画の仕方をするかという1つの見本となっていると思う。また青森も頑張っていきたいと思うので、よろしく願います。
- ・ 少し整理をさせていただく。資料 8-1 の 2 枚目「日本の原子力（核燃料サイクル等）を巡る状況について（案）」をご覧いただきたい。このように、出来事を年度を追って書いたのは、どうして日本は核燃料サイクルというものを取り上げようとしたのか、ということが見えるように、昭和 31 年から簡単に話すことにしたからである。
- ・ この中に、例えばこういうものを入れた方がいいということ、今の核燃料サイクルにかかわる事故で、これがあつた方がいいというのがあれば、ぜひご意見いただきたい。

（吉岡委員）

- ・ とりあえず一般的な感想を言うと、80 年代までが簡単過ぎる。例えば、61 年 2 月に出された長期計画に関しては、高速増殖炉を開発するという方針を掲げたのがポイントだと思うので、プルサーマルというのは主流ではなかったという点が重要だ。また、資料 8-1 の 2 枚目の 2 つ目の項目は要らない。ほかにも抜けている点は多いと思う。
- ・ また、抜けている点で特に重要なのは、青森県への核燃料サイクル基地申し入れと受け入れとか、特に青森に関する情報である。その辺が抜けているのは、これは失礼じゃないのかという気がする。

（木元座長）

- ・ おっしゃったように、住民に関連する部分を加える。資料 8-1 の 2 枚目の 2 つ目の項目、つまり昭和 36 年、1961 年 2 月に「長期計画でプルサーマルの実用化を記述」とあることについては、実際の長期計画にはきちんと高速増殖炉のことまで書いてあるので、これも踏まえて記述したい。

（碧海委員）

- ・ ウラン濃縮との関連で、核不拡散の網がかかっているというようなことはどこかで言うのか。平和利用との関連で、そのあたりをしっかりと頭のところで押さえておいてほしい。

（木元座長）

- ・ 「濃縮工場操業開始」と書いてあるあたりの前ぐらいに、日本が N P T（核不拡散

条約)に入ったことを、記述したい。

(碧海委員)

- ・ 関係者の方はよく分かっているが、一般の人は必ずしもその辺を意識しているわけではないと思う。

(中村委員)

- ・ 最終処分については入れておいた方が良いと思う。昨年末、NUMO(原子力発電環境整備機構)が立ち上がったこと等。中間貯蔵と最終処分が出てこないとサイクルにならない。
- ・ 特に青森では、計画が遅れに遅れて、このまま変わらないということを心配していると思うので、その辺は入っていた方が良い。

(木元座長)

- ・ そうすると、日本の燃料を海外で再処理した、いわゆる高レベル放射性廃棄物が青森に帰ってきていることと、これはいずれにしても、最終処分地を今決めようとしており、そこに運ばれるものであることが分かるような記述をする。

(中村委員)

- ・ それを入れておいた方が良い。最終の方も進んでいるというのを明示しておいた方が良いと思う。

(木元座長)

- ・ そう思う。高レベル放射性廃棄物は、「特定放射性廃棄物」という言い方をしていると思うが、この法案公布についても記述したい。

(小川委員)

- ・ 「募集が開始された」の方が良いと思う。

(木元座長)

- ・ 法案ができたのが先で、公募はその後に来る。公募に関しては、座長報告の最後の方に来ることになると思う。

(中村委員)

- ・ 法案と公募では、「特定放射性廃棄物」と「高レベル放射性廃棄物」というように、名称も違うから、両方記述した方が良いと思う。

(木元座長)

- ・ 日本でもきちんと法律ができたという報告となる。また、中間貯蔵も各地で論議されているし、実行されようとしているものもある。むつ市が「リサイクル燃料備蓄センター」立地可能性調査を東京電力に依頼したというようなことも事実として、新聞報道の上から取り上げたいと思う。

(井上委員)

- ・ 資料 8-1 の 2 枚目には、事象の始まりがいっぱい書いてあるが、例えば、関西電力のMOX燃料についての問題が収束していることなど、経過や現状について、括弧づけでも良いので、書いて欲しいと思う。

(木元座長)

- ・ 書くことにしたい。今はどうなっているかについて記述していないので、自分の言葉でフォローしなくてはいけないと思っていた。BNFL社のMOX燃料はイギリスへ送り返したと聞いている。

(井上委員)

- ・ 書けるものはそういった現在の状態を書いていただきたいと思う。

(木元座長)

- ・ 時系列的に記述すると、事象と現状を離して書くことになるので、今おっしゃったように、括弧書きで記述することとしたい。

(井上委員)

- ・ JCOも同じだと思う。今どうなっているのか。もしくはどこで収束しているのか。

(木元座長)

- ・ そう思う。

(竹内原子力委員)

- ・ 国内の使用済燃料の青森の受け入れ開始というのを加えた方が良いと思う。

(小川委員)

- ・ 青森に関係することにちょっとした印をつけるのはどうか。

(中村委員)

- ・ 小川委員が言われたのは、青森関連の事項については黒丸等をポンポンポンとつけていくという意味だと思う。ほかとの差異を明確にしておくということ。そのためにも、少し青森関連の事項は増やしていただく方が良いと思う。

(木元座長)

- ・ そう思う。

(吉岡委員)

- ・ 関連して言うと、むつ小川原開発、原子力船「むつ」、新型転換炉の中止とフルMOXへの計画転換等は青森にとって極めて重大な事件だと思う。

(木元座長)

- ・ 重大な事件だが、核燃料サイクルにテーマを絞ったときに、どこまで手が伸ばせるかという問題が出てくる。検討してみる。重要な事項は追加し、全体で座長報告は2枚を目途に作成したい。
- ・ 第1部の司会進行についてだが、前回も中村委員にお願いしたのでご異論はないと思うが、中村委員から一言いただきたい。

(中村委員)

- ・ 座長報告の方は15分ぐらいでまとめていただけるか。

(木元座長)

- ・ 15分以内におさめる。

(中村委員)

- ・ 正味1時間15分ぐらいはパネルディスカッションにとれるというふうに考えてよろしいか。

(木元座長)

- ・ はい。このお3人は、もう申し上げなくてもお分かりだと思うが、芦野氏は青森県弘前市にいらっしゃる。六ヶ所にも何回もいらしている方である。近藤駿介氏は皆様ご存じと思う。それから、蟹瀬氏は、今はフリーのジャーナリストとして司会、コメンテーター、レポート等をなさっている。最近、エネルギーに大変関心をお持ちになって、今、衛星放送で、エネルギー関連の番組で司会をしていらっしゃる。

「環境とエネルギー」というタイトルがついていたと記憶している。

(碧海委員)

- ・ 「日本のエネルギー 光と影」ではなかったか。

(木元座長)

- ・ そうだったかもしれない。そういう方なので、エネルギーは広い視野から話していただけたと思う。批判もなさると思う。
- ・ 第2部は、会場の皆さんからまずご意見を伺った上での討議ということで、前回は碧海委員と井上委員のお2人にコーディネートしていただいた。今度ガラッとまたお2人違う方という考え方もあるが、前回の方が1人残って、もうひと方、どなたか、このコアメンバーの中から加わっていただこうと考えている。それで、私の案で大変申しわけないが、今回あいうえおで、碧海さんに残っていただいて、一番最後の「よ」が1人いらっしゃるの、吉岡さんに加わっていただきたいと思っている。これは単なる私のアイデアだが、いかがか。

(碧海委員)

- ・ 当日の朝にしか青森入りできないが、よろしいか。

(木元座長)

- ・ 良いと思う。私も当日入りになる。事務方は前日から入る。他にご異論がなければ、吉岡委員、いかがか。

(吉岡委員)

- ・ 了解した。喜んで引き受けさせていただく。

(木元座長)

- ・ よろしく願います。お2人のキャラクターに違いがあるが、そこがまた良いところだと思う。お2人で議論されても良いと思う。司会者だからどうだという制限は全くなく、1人の人間として、1人の国民として議論いただくという方向で良いと思う。
- ・ ただし、あくまでも会場の方が中心であるということだけ、念頭に置いていただければ良いと思う。私たちは常に「広聴」、広く聞くことをまず前提にして、どうしたら良いかということの前向きに積み重ねていくという手法をとっているの、よろしく願います。
- ・ では、私の案で通ったと考えてよろしいか。(拍手)

(小川委員)

- ・ 今回、司会はいいうえお順とのことだが、今後はまた新たに仕組みは決めると考えてよいか。

(木元座長)

- ・ そうである。
- ・ 今度の青森もご参加いただくのがなかなか難しいコアメンバーの方がいらっしゃるの、その方たちにも、どういうふうに展開したかという事実を知っていただかなくてはいけないと思うので、テープ起こしで作成する議事録を、配付させていただき、その上で次へのステップを組み込んでいきたい。
- ・ 今回、日本原燃、オフサイトセンター等を視察することを考えている。

(犬塚補佐)

- ・ 日本原燃のほかに、オフサイトセンターとITERが最近話題になっているので、ITERの候補地は見るだけかもしれないが、その2つを入れようと考えている。

(木元座長)

- ・ ご視察のご希望があれば、15日の市民参加懇談会の次の日、あるいは前日、両方可能なので、お申し出いただければと思う。こういうときでないと、見られないという方もいらっしゃると思う。後ほど事務局の方で調整させていただく。

(碧海委員)

- ・ 今回は第2部のマイクの問題で、何か検討しているか。

(木元座長)

- ・ まだ検討していない。座席の一番前と舞台の間にマイクを立てて、そこに参加者の方に来ていただき、氏名などを明らかにした上でご意見をいただこうと考えていたが、碧海委員から提案があり、司会側があくまでマイクを握っているという前提で、会場にマイクを回すという方法もある。そのところを碧海委員から、ご意見いただきたい。

(碧海委員)

- ・ マイクを渡してしまうのではなくて、持っていき、その方に近いところで、よろしければ立っていただければと思う。前に出てくださるのは良いが、前回のように、舞台上にいる人の方をみんな向いてしまう。つまり、会場の参加者と語るという感じにならない。

(木元座長)

- ・ そうすると、マイクを逆向きにすれば良いか。

(碧海委員)

- ・ 完全に後ろ向きというのも、しゃべる人がちょっとやりにくいだろう。会場の真ん中ぐらいにあれば良いのかもしれない。

(木元座長)

- ・ 会場の座席の方を見て立っていただき、マイクを舞台向きにすれば良いか。

(碧海委員)

- ・ そうだが、そうすると、完全に舞台を背中にしてしまう。むしろ階段の真ん中あたりにマイクを置くのが良いと思う。会場に階段があるので。

(木元座長)

- ・ 座席に挟まれた通路がある。この中間あたりにマイクを置くということか。

(碧海委員)

- ・ そのほうが良いと思う。

(木元座長)

- ・ スタンドが短いものを置いておいても良いかもしれない。そして、その都度、意見をおっしゃりたい人が行って、そのマイクを外してお持ちいただくか、あるいはマイクに近い方はそこに出ていただく。正面には置かない。

(碧海委員)

- ・ 正面に置いて良いが、前に座っている人だけに使ってもらうことになる。

(小川委員)

- ・ 真ん中にマイクを置いて、どちら向きに話していただくのか。舞台向きか。

(碧海委員)

- ・ それは舞台向きで良いと思う。真ん中ぐらいなら、参加者がみんな、話す人と同じところに座っていることになる。前回のようになると、完全に前へ出てきて舞台のパネリストに向かって対峙してしまう。

(小川委員)

- ・ 舞台向きだと、マイクがどこにあるかと、顔が合うのは舞台の人だけではないか。

(木元座長)

- ・ その人がパフォーマンスの上手な方だったりすれば、会場の真ん中あたりなら、やりやすくなると思う。

(小川委員)

- ・ 青森の方の県民性はいかがか。

(木元座長)

- ・ 活発だと思う。では、碧海委員のご提案のように、会場の中間地点にマイクを置かせていただき、臨機応変に対処させていただき、なるべく多くの方のご意見を承るようにしたいと思う。
- ・ その他、何かこういうことをやった方が良いというご意見はあるか。

(小川委員)

- ・ 舞台の設営状況について伺いたい。

(犬塚補佐)

- ・ 申し訳ないが、本日は間に合わなかった。またファックス等で送らせていただければと思うが、基本的には前回のよう、コアメンバー、パネリストの皆様の前にお座りいただき、後ろに説明者というように、2列で入っていただくことを考えている。

(木元座長)

- ・ 今ちょっとご説明があったが、説明者にご参加いただくことを考えている。まだ調整中だが、プールの水漏れの件等に関するご質問も必ず出ると思われることや、今後の行く末がどうなるかというご懸念もあり、日本原燃(株)自体がどうお考えになっているかということも伺えるように、説明者としてのご参加をお願いしている。
- ・ 同様に、原子力安全・保安院や資源エネルギー庁のご参加についてもお願いしており、調整中である。
- ・ パネリストとかコアメンバーがお返事できない部分があると思われるので、何らかの形で、いわゆる当事者の方たちにご参加いただいて、事実の解明等をしていただきたいと考えている。
- ・ 一般市民の皆様の参加の申し込みは、現在何人か。

(犬塚補佐)

- ・ 22名である。

(木元座長)

- ・ 今後増えると思うが、どういうご所属の方がお見えになるかは、皆目分からないようになっている。それで良いと思う。

(吉岡委員)

- ・ 後半の司会をする者として、やや不安があるのは、恐らく安全性の問題についてい

ろい議論が出ると思う。例えば、中間貯蔵施設に関しては、外洋に面した港に常時、使用済核燃料を積みおろしていいのかとか、戦闘機が突っ込んできたらどうだとか、地震がどうだとか、あるいはキャスクの長期信頼性がどうかとか、そういった問題がかなり多数出ると思うが、それに対して一体だれが答えるのか。近藤氏が全て答えるかという、近藤氏は必ずしもそういう面については最高のプロではなく、若干分野が違う方である。当事者が答えた場合には、それが果たして信頼されるかという問題があるので、当事者と住民とのやり合いになる可能性があり、それは市民参加懇談会の趣旨とは違うのではないかと思う。その辺りはいかがか。

(木元座長)

- ・ 今のお話は、幾つかに分けて考えたい。例えば技術論になった場合、近藤氏がお答えになる部分と、原燃の技術系の方にお答えいただく部分と、あるいは保安院がお答えになる部分があって、ある程度カバーできると思う。ところが、例えば、安全性というのはどういうものなのかという非常に大まかな論議に展開した場合には、どうするかという問題があるが、ある程度の社会的な常識の範囲内の安全性ということに収れんしていくだろうと思う。
- ・ 具体的な技術論の安全の部分と、安全性というものをどれだけ我々が認知できるのかという部分があり、後者の議論が出れば、おもしろいなと思う。例えば、シュラウドに一回りひびが入ったって運転に差し支えないし、その評価を1年後、2年後、3年後にもう1回やろうということによって安全性は担保されるという考え方と、ちょっとでもひびが入ってはいけないという考え方がある、というように、安全をどうとらえるかという観点の議論になるかもしれない。技術論よりその方が良いと思う。もちろん、技術論もやっていただくが、一般の方には十分には分からないところがあるし、データをたくさん持っていかなければならなくなる。

(小川委員)

- ・ 本当にそこまでやるなら、データはたくさん必要になると思う。

(吉岡委員)

- ・ そういう場ではないと思う。この場合は普通の市民が集まるわけだから、知りたいものを納得するかどうかというのは、医療におけるインフォームド・コンセントと同じで、患者にわからない言葉で言われても意味がなくて、そういう説明の仕方自体が不信につながる。つまり、説明として、「どこかで審査したから大丈夫です」とか、そういう型どおりの答では全然だめだと思うので、それに対して私たちとして、どのようなリアクションの仕方をするのかというのはなかなか難しい問題だと思う。

(木元座長)

- ・ そういった説明が問題点として挙がる事は、すごく良いことだと思う。「知りたい情報は届いているか」がテーマだから。
- ・ 例えば、以前、日本原燃がOHPをたくさん使って、プールの水漏れについてご説明されたが、言葉が英語だったり、日本語でも難解な言葉だったりということがあった。それより以前に再処理関連のご説明があったときには、みんなでかみついた。「日本語であっても、『不溶解残渣がここにたまっておりまして』などと言われても分からない。『不溶解残渣』でなく、『溶けなくて残ったかす』と言えば良い」。しかし、専門家としてはそんな言い方はできない、という。専門家は何も分かって

いないということである。

- ・ すなわち、一般の方々に分かっていただくためには、この人にはどういう言葉を使ったら自分が考えていることやある事実が分かっていただけるかというトレーニングができていないということである。
- ・ そういう問題点が挙げれば、それを私たちが受けとめて、今度は原子力委員会に報告するときに、やっぱりだめじゃないか、専門家は何もわかっていなかったというように報告すればよい。それはどんどん拾っていきましょう。しかし、そこで私たちは、答は出せない。

(中村委員)

- ・ 我々コアメンバーとしては、議論をおおる必要はないし、基本的には議論の場ではないと思う。安全、あるいは安全性ということについて、どういう基準で誰が判断しているかということは大事であり、明確にしなければいけないので、それについて異論があるということはお受けする。しかし、異論の内容や、説明している、あるいは基準となっている、安全性あるいは技術的安全の基準というものを議論をする場ではない。
- ・ こういうふうにして安全性を担保している、というように、しかるべきところは説明する。そして、皆さんに伺ってみたところ、いくつか疑問が出て、それは言葉の疑問であったり、安全を判断する基準そのものに対する疑問であったり、いろんなケースがあると思うが、それを我々はキャッチしなくてはいけないと思う。したがって、そういうコーディネーションの仕方というのが一番良いと思う。

(木元座長)

- ・ それからもう1つ。核燃料サイクルの流れの中でいくと、「もんじゅ」の話題がどうしても出てくる可能性がある。例の判決があって、その根底には、あれだけ安全に対して審議をして、いろいろ経て、ゴーサインが出たものに対する判決ということで、安全性に問題が出たのではないかというような議論も展開するかもしれない。上告し、今後どういう方向に行くかわからないので、その時点での事実だけは押さえておくという程度にとどめたいと思う。

(碧海委員)

- ・ 質問だが、前回東京で開催した時には、電力の生産地と消費地という、立場の違いがあった。青森の場合には、その辺りは一体どういうふうに考えたら良いのか。というのは、青森県でも、六ヶ所村とその他の地域との関係というのが、私にはまだよく見えていないところがある。
- ・ それから、もう1つは、テーマが「情報が届いているか」ということだとすると、青森の場合には、県や自治体がどれだけ情報を提供しているのかという問題があると思う。そういう意味で、舞台の側に自治体の方は乗るのか乗らないのかということをお伺いしたい。

(木元座長)

- ・ 青森で開催するので、県にはご相談しています。ただし、ご登壇いただくということまではお話はしていない。どうするのが良いだろうか。広報関係の方がいらした方が良いだろうか。

(碧海委員)

- ・ 自治体としてどうしているのかということは聞きたい。答えていただきたい気もする。

(中村委員)

- ・ 登壇するのはちょっとおかしいと思う。

(木元座長)

- ・ だから、会場にスタンバイしていただいて、そういう問題になって、参加者の方から「県は何も出してない」というような話が出たときに、「県の方、いらっしゃいますか」と声をかけて、いらっしゃれば良い、という程度でいかがか。

(小川委員)

- ・ それがいいと思う。

(中村委員)

- ・ それぐらいだと思う。

(小川委員)

- ・ 市民参加懇談会は国として行くわけですから、地方自治体というのは違う立場だと思う。

(碧海委員)

- ・ なぜこういう質問をしたかということ、過去に何回か青森へ行って色々な講演会とか研修等に参加したときに、青森県の人たちは結構努力されているな、と感じたし、また、職員の方の中にも話の分かっている方が多くいるし、議論していても面白い方もいるので、例えば東京でやるのとは大分違うという気がしているためである。
- ・ 前回、東京で開催したときに、福島県の方が生産地の立場で意見を言われたが、青森県でも直接かかわっている立場での発言があるのではないかと思った。
- ・ 市民参加懇談会の当日は、例えばそういう意見が出てきたりしたら、それに対して自治体として答えられる方がいるのかどうか、あるいは答える体制になっているのかどうかということ伺いたかった。

(中村委員)

- ・ 当日そこで、県なり市なり村なりが、「やっています」「いや、それは伝わってない」というのは、それはそれで良いが、そういう場かなというのはちょっと疑問である。

(小川委員)

- ・ この市民参加懇談会というのは、県とか地方自治体の広報に関しては正面切って議論する場ではないのではないか。

(碧海委員)

- ・ でも、情報に関しては、青森県民の方は何よりもまず県なり自治体が出す情報を重視すると思う。今回、国からの情報だけを議論するわけではないだろう。

(木元座長)

- ・ 実は本日、青森県庁から傍聴にいらっしゃっている。牧野さん、いかがでしょうか。

(牧野総括副参事)

- ・ すみません。今日はちょっと聞きに来ただけだったのですが、青森県庁の牧野でございます。失礼いたします。

(木元座長)

- ・ ありがとうございます。今こういう討議をしているが、会場にいらっしゃれば、いざというときには話していただけるという形はいかがか。

(牧野総括副参事)

- ・ 持ち帰って相談させていただきたいと思う。今いろいろお話があったが、県も広報等、実際にやっているようなことをお話しできればと思う。

(小川委員)

- ・ 県の方が正面に出るとかいう問題じゃなくて、そこで疑問が出れば、会場の人に聞くというふうな解決の仕方が、この市民参加懇談会ではあり得べき姿かなと思う。

(木元座長)

- ・ それはそうである。

(井上委員)

- ・ 先ほど吉岡委員がおっしゃった、意図しない、思っていなかったような質問の1つに、社会的な、例えばミサイルの問題、飛来してきたこと、外海に面していること、そういった不安、地域的な不安というのも原子力にまつわることとして、あると思う。
- ・ 青森にほかの用事で行ったとき、乗ったタクシーの運転手さんに「何しに来た？」と言われて、「ちょっとエネルギー問題の勉強会で青森に来ました」と言ったら、飛行場から青森市内に着くまで、缶詰状態の中で、「あんたらはね、使うばかりで、その結果は全部自分らがここで引き受けているんだ」と、ずっと40分間言われたことがある。消費者の人たちが能天気な顔で、「ちょっと六ヶ所見に来たのよ」とか「勉強に来たのよ」なんて言ったら、さっとそういう反応をされる人もいるし、もちろん自分たちが大局的な視点で引き受けるんだという意見も一方で聞くこともあり、私たちが思うよりも、温度の高低の落差があるのではないかと思う。
- ・ そのタクシーのときは、「一番気に入らぬのは、勝手に青森と決めて」と言われ、「いや、私、勝手に決めたわけじゃないですし、そのいきさつは私たちもよく知らないんですけど。でも、どこかでこのことは解決しなきゃいけないし」とか、しどろもどろで返事をした。根拠も経過もよくわからなくて、どこかで決められたことを引き受けなければいけない自分たちの気持ちをどうしてくれるんだ、というお気持ちで、大阪から能天気に来て「ちょっとお勉強に」などと言った私に対して吐露されたのだと思った。私たちが表面だけを見ていて、「みんなで協議しましょう」などと言っても、一皮、二皮むくと、このような根元の部分の思いを持っていらっしゃる方もたくさんいるだろう。そういう人たちの声が市民参加懇談会で出てきたら良いと思う。
- ・ そういう方たちから、技術的な問題ではなく、社会的な不安材料が出てきたときに、誰が答えるのか。

(木元座長)

- ・ それは、壇上にいる人も会場にいる人も県の人と一緒に考えて考える問題である。

(井上委員)

- ・ 私もそう思う。

(木元座長)

- ・ 対立関係でやっても不毛である。同じことを聞いても、受け手によって考えが違っ

てくる問題があるので、それこそ大討論できると思う。

(小川委員)

- ・ 先ほど、碧海委員が、青森は消費地なのか生産地なのか、といったお話をされた。消費地でもなく生産地でもないが、再処理だけじゃなくて濃縮もあるから、「支援地」と言うか。そういう立場で、色々な方の思いを吐き出していただいで構わないと思う。それぞれのご意見として、誇りに思っている方もいるし、そうでない方もいらっしゃるだろう。

(井上委員)

- ・ そういうご意見を伺えたら良いと思う。

(小川委員)

- ・ 公開の場でお聞きするということが重要だと思う。

(木元座長)

- ・ 数年前に、青森がどういう事業をやっているかということ、消費者は余りにも知らなさ過ぎるという声があったときに、あれは防災問題だったと思うんですけども、知事が入港を拒否しましたよね。

(牧野総括副参事)

- ・ 2回拒否しました。

(木元座長)

- ・ そうだった。そういう行動を起こされたことによって、青森がこういうことをやっているんだと、やっとわかったということがあった。それほど乖離している部分があるので、そういう何か1つの行動を起こされたことで知るのではなく、こういう機会に少なくともそこにいた人間が、我々が知って、そしてお互いに意見を交流し合って、では、どうやったら自分1人1人の問題として青森を見ることができるといところまで話が展開されれば良いと思う。やれ立場がどうのこうのという問題ではなくなると思う。日本全体のエネルギーだ、と、そこまで大上段に振りかぶって良いと思う。市民参加懇談会というのは、基本的にはそういう視点だと思う。このような漠然とした答えでよろしいだろうか。

(碧海委員)

- ・ 少なくとも、今回は六ヶ所村ではなく、青森市で開催するというので、青森県だって広いのだから、必ずしも六ヶ所の人ばかりがいるわけではないというようなところを、なるべく忘れないでやりたいと思う。

(中村委員)

- ・ 六ヶ所、六ヶ所と言うけれども、青森には東通だって大間だってあるし、今、中間貯蔵についてはむつ市で調査していると聞いている。

(木元座長)

- ・ 青森県全体の合意があった上で六ヶ所村の各施設が存在しているという視点があると思う。そのタクシーの運転手さんも青森市の運転手さんであり、六ヶ所村の方ではないだろう。その方たちがそうおっしゃるというのは、かなり意識が高いということの表れだと思う。

(井上委員)

- ・ そのときは、大きなショックを受けた。

(中村委員)

- ・ 原子力関連立地とそうでないところの違いはあると思う。それは私達もしっかりと意識していなければいけないと思う。そこでの議論として、私達は役割論だと思ふことがあるが、青森の方は必ずしもそれを認めないかもしれない。「ではどうするか」という話ができるかどうか問題だろうと思う。

(木元座長)

- ・ むしろ、我々が解決のために行くのではないという大前提から言うと良いと思う。

(中村委員)

- ・ そう思う。特に第2部では、我々は解決のためとか説得のために行くのではないということをご理解いただくと良いと思っている。

(木元座長)

- ・ 牧野さん、何かご意見があればお願いしたい。

(牧野総括副参事)

- ・ 特に、今回の趣旨からして、青森県民の方々がどういう意見を持って、例えば国の原子力委員会に期待しているとか、こういうふうにしてほしいとかということをご直接聞いていただくことが大事だと思う。また、マスコミ等に取り上げていただければ、参加されなかった方も知ることができる。先ほど六ヶ所村の話も出たが、核燃料サイクル関係は、六ヶ所地域だけではなくて全県的に関心を持っておられるので、有意義にやっていただければと思います。

(木元座長)

- ・ ありがとうございます。昨日、「エネルギーと環境」という話で熊本に行ったときも、500人の女性の方が非常に関心を持っていて、自分たちの問題としてとらえているということで、市民参加ということが何をやるのかもご理解くださったので頑張っていきたいと思う。ひとえに皆様の肩にかかっている。そういう意欲で、本当に平常心で心を開いて臨んでいきたいと思う。市民参加懇談会でも、今日のように討議がバンバンあって良いと思う。
- ・ その他、何かご意見があれば、お願いしたい。

(犬塚補佐)

- ・ 細かい話ですが、休憩はどうするか。

(木元座長)

- ・ 何分にするか。今回は、第1部と第2部の間で、15分だった。

(中村委員)

- ・ とった方が良いと思う。

(木元座長)

- ・ 前回と同様に休憩を取ることとする。
- ・ 第1部は1時間半、第2部は約2時間予定しているが、会場は何時まで使用可能か。16時30分終了予定だが、仮に17時までではどうか。

(犬塚補佐)

- ・ 大丈夫である。

(木元座長)

- ・ では、この件はこれで終わらせていただくが、よろしいか。今後、何か詳細につい

て検討すべきところがあったら、皆様方にご連絡差し上げて、ファックスでご回答いただくようにするので、よろしく願いしたい。座長報告も修正版ができ次第、お送りするので、ご検討いただきたいと思います。

(2) これまでの活動からの整理について

事務局より、資料市懇第8-2号について説明。

(木元座長)

- ・今年度も市民参加懇談会を何回か、コアメンバー会議を含めて開催した。何らかの形で原子力委員会の方にご報告をしたいということも合意をいただいた。その取りまとめについて、まず考えなければならない。また、今後の展開として、今までの議論を踏まえて、こういう形でやったら良いのではないか、あるいはこういうところが抜けていたから、これを入れた方が良いのではないか、ということについてもご意見をいただければありがたいと思っている。
- ・東京とか青森の、いわゆる市民参加懇談会のオープンの場と、コアメンバー会議の中で議論していくこと それはもしかしたら原子力委員会そのものの存在を問うことでもある そういうことを我々はやっていなかったのではないかというご意見でも構わない。何でもご意見いただいて構わないと思う。
- ・核燃料サイクルというものは、長計で決まっているけれども、いつも私が言っているのは、「原点からもう一回トレースしてみよう」ということである。結論は同じかもしれないけれども、もう一回トレースする必要があるのではないか。
- ・原子力委員会で、もう1つ、どうしても立ち上げてほしいと言って立ち上げた「核燃料サイクルのあり方検討会」、今まで4回開催したが、この場でも申し上げた。そうすると、原点からもう一回トレースしてみよう、どういう経過をたどっていて、どういう合意を得て、どこで取りこぼしがあったのかが見えてくると思う。
- ・そういうトレースをしようと言ったときに、それは核燃料サイクルの否定かと、短絡的におっしゃる方もいる。そうではない、私たち自身のエネルギーはどうあったらいいか、私たちの暮らしはどうあったらいいかということ根底にトレースしていこうということだから、とても有意義だと私自身は思う。ここのところ、そういう、私と同じようなことをおっしゃる方が目立ってきた。それは、否定とか肯定の以前の問題で、もう一回、私たちはこの原子力行政について、どういう道をたどってきたんだろうか、ということ問うという形で良いわけである。そういう大きなものと、あるいはもっと身近な消費地と立地地との交流のあり方でも良いし、どんなことでも構わないので、網羅してご意見をいただければありがたいと思う。
- ・市民参加懇談会を何回か開催した中で、こういうことが考えられる、あるいはこういう報告をぜひしたいというものをまとめていきたいと思う。
- ・コアメンバー会議、あるいは市民参加懇談会で、大分得たものはあると思う。それを取り出し、報告の中に込めていきたい。それを原子力委員会が真摯に受けとめて、自分たちの考える、あるいは自分たちの行動の中に反映させていかなければいけないと思っている。いかがか。

(小川委員)

- ・確かに日ごろ、原子燃料サイクルは決まっているという雰囲気の中で仕事をしてい

る1人として、そこを本当に自信を持ってそうなんだ、国民のために良いから、そうなんだというところを、原子力関連の仕事に携わっている者としても、トレースするという言い方が木元座長と私の定義がお互いに合っているかどうかは別として、私たちにとって必要なことだと思う。

- ・ 原子力基本法にある「民主、自主、公開」に従って、これまでも公開してきたと思う。しかしそれは、発信する側の自己満足の公開であって、30年前という時代には、政府からのトップダウンでやってきたのだと思う。そういう意味でその間、国民の側に、すごくストレスがたまってきたのだと思う。原子燃料サイクルについては、私は個人的には賛成するが、その政策決定プロセスにおいて、国民の人たちがプロセスごとに知らされてこなかったという不満足感がまだあるような気がする。そこで、トレースということなのか。

(木元座長)

- ・ トレースしかないと思っている。

(小川委員)

- ・ 今言った部分をしっかりと説明した上で、ご意見を聞くということで、自信を持って原子燃料サイクルは日本に必要なんだというふうに進めたいと思う。

(木元座長)

- ・ 私個人は、小川委員とは少し違う意見である。というのは、最初に、原子燃料サイクル、核燃料サイクル事業というものは国民のためにやっているんだという思いがあるとおっしゃった。説明の最初に、それがまず出てきてしまうところが違うと思う。例えば、結婚するときでも、「僕はあなたを幸せにするよ」と言うけれども、幸せ観が違ったりする。幾ら相手が「幸せにするよ」と言っても、幸せになるかどうかわからない。そういう部分が国民にはあると思う。
- ・ 原点からトレースするというのは、私たちはどういうことをもって快適な暮らしを維持しようとしているのか、エネルギーをどう使おうとしているのか、暮らしのレベルをどうしようとしているのかということをお互いに話し合っ、では、そのためにはエネルギーの供給のあり方はどうしたら良いか、というところから始める。そのときには、核燃料サイクルは全然出て来ない。どうしたらいいだろうかと考えると、エネルギーの供給のあり方はいろいろある。そこには、環境の問題もある。資源の問題もある。地理的条件で、他の地域から電力をもらえないといったことなど、いろいろある。そういったことを加味していったとき、それはトレースである。トレースしていったときに、核燃料サイクルというのがここに存在するとか、金がかかるが、それは国民の合意が必要だとか、色々なことが出てくると思う。最後にこうなって今の長計ができていうところまでたどり着ければ、見えないものが見えてくるだろうし、あるいは、分かりにくかったところが分かってくるだろう。その間で色々な反論もあると思う。今、それをトレースする必要がある、あるのではないか。それをやらなかったら、国民的な合意をとるということは無理だと思う。

(小川委員)

- ・ 国民のためにという表現はすごくおこがましい表現で申し訳なかったと思う。
- ・ エネルギーを考えると、原子燃料サイクルの存在は、そのときにはないのだというところがよく分からなかった。

(木元座長)

- ・ ないわけではない。しかし、あるからこれだというのは、良くない。原子力委員会でも論議の中で、「長計があるから、これをわかりやすい説明でお話しする」という話になることがあり、そういうときは、ちょっと待ってと言う。それありきになってしまうから、それから始まってはいけないと思う。存在するのは事実だが、もう一回原点から考えてみようという姿勢でないと、受け入れてもらえないという実感がある。だから、誤解を受けるのを百も承知で、今申し上げている。原子力委員会の中でもそれを発言している。

(小川委員)

- ・ そうすると、トレースというものの具体的なやり方を考えなくてはならないが、真っ白から始めるとしても、真っ白になりにくい情報がたくさんあり、難しいと思う。

(木元座長)

- ・ 「あなたはどのような暮らしがしたい？」から始めれば良い。「電気があっていいよね」とか、「なきゃ困るよね」とか。そして、この電力はどう作ったら良いか、何でつくるか、石油、石炭、化石燃料？と考えていく。これは環境に悪いし、資源としても有限性がある。一方で私たちは今、原子力発電を実際に使っているけれども、原子力発電というのはどうなんだろうと、その思考のプロセスで見えてくるだろうと思う。
- ・ そのときに、ワンスルーでなく、リサイクルして使うという方法もある、というようにトレースしていく。「いや、サイクルは要らない、ワンスルーでいい」という意見も出るかもしれない。では、日本はどのような政策をとったら良いか。そういう流れで、追いかけていくことが重要である。だから、私たちは良い原子力政策をやっているからお願いするということではなく、あなたが選ぶのですという形をとらなければいけない。1人1人にそれぞれの判断で選んでいただくためにトレースする。それぞれが、こういう生活をしたい、こういう経済成長をしたいという思いがあるから、供給の形がここまできたのだと思う。為政者というか、ある人たちだけが国民のためにとって一生懸命やったことが逆目に出ることがある。さっき吉岡委員からインフォームドコンセントの話があったが、話し合いで、時間はかかるけれども地道にトレースしていかないと、結論が得られないと私は思う。

(吉岡委員)

- ・ 木元座長の、原点からトレースという言い方は、最初は非常に我が意を得たりと思った。私自身が「歴史的アセスメント」という言葉で、この10年ぐらい歴史家として、原子力を中心にやってきた。本も出したし、論文もたくさん書いた。歴史には転換点が幾つかあるが、その各々の時点において、実際にどのように選択が実施されたのか、誰が主役で、誰が脇役で、客観的にどう決定がなされたのかということの積み重ねが歴史である。その結果として、非常に変な道に迷い込んだと思っているが、そういう歴史的アセスメントの作業を地道に、客観的にたどるのが重要ではないかと思っている。
- ・ 今の原子力がこうなってしまったことのルーツを明らかにすることは、重要なことであり、それゆえに原点からトレースという木元座長の発言には同意したのだが、後半部分が、何か非常に主観的な話になっているように思う。つまり、エネルギー

をどうしたいか、といったことではおそらく決まってきたのではないと思う。各方面の利害関係者それぞれが、もう少し政治的、経済的な思惑を持って選択に関与してきて、その合意の上で決定がなされてきたのだと思う。それを追うには、かなり緻密な歴史家的な作業が必要だが、それを、できれば原子力委員会でやるべきであると前々から言っており、ぜひやってもらいたい。その上で、核燃料サイクルあるいは高速増殖炉というものに対する、政策の見直しということも含めた答を出すのだが、結論は、最後までオープンにして欲しいというのが私の立場である。肯定か否定かは最後に言えばよく、最後まで言わないということによってやっていくという姿勢で、このトレースの作業を重ねることが重要なので、ぜひやって欲しいが、市民参加懇談会でこれができるか疑問である。

(木元座長)

- ・ そういうふうに疑わないで欲しい。できることをやる。結論を 100%そこで得ようとは言っていない。できることはやって、少なくとも国民の中にもやもやと疑問が生じているならば、それを解消する手だてはたくさんあると思うから、その手立ての1つとして原点からトレースしてみるということ。
- ・ もう1つは、原子力、核燃料サイクルにイエス (Yes) でも、「だけれどもね」とバット (but) がつく。原子力、核燃料サイクル、とんでもない、「もんじゅ」もノー (No) といいながらも、「でもね」の部分がある。このバット、すなわち重なり合う部分、これが私は話し合う場所だと思っている。それを続けていくことが、トレースすることにもつながっていくと思う。だから、反対のための反対、イエスのためのイエスではなくて、もっとオープンにバットの重なり合う部分を1つのとっかかりにしてトレースしていこう、という考え方である。

(吉岡委員)

- ・ トレース自体はよろしいが、それを市民参加で実施するには、市民に歴史家的なやり方をお願いするということになる。それも1つの手だとは思う。青森は特にそういう歴史についての思いは深いと思う。

(木元座長)

- ・ 申し訳ないが、今は青森ではなく、今後の市民参加懇談会でどういうことがテーマとして掲げられるか、という検討をお願いしている。

(吉岡委員)

- ・ 青森でも可能であろうと思った。もう既に原発立地から 40 年たっているのだから、ほかのところでも可能かもしれない。

(木元座長)

- ・ 確かに青森でもトレースが入ってくる可能性はあると思う。こちらからは提案しないが、第2部の方でお話があれば、それは受ける。ということでよろしいか。市民参加懇談会のコアメンバー会議で取り上げる議題として提案しており、ご報告の中にそれを入れるということではない。一案として、これをこのコアメンバー会議でどうとらえるかということでもある。

(中村委員)

- ・ 多分、吉岡委員も私もそうなのだが、それを市民参加懇談会のメインテーマとすべきかどうかということについては疑問がある。だから、木元座長が言われている

ことを、1つのコンセプトあるいはテーマとしてとらえ、その認識を踏まえた市民参加懇談会の開き方という意味とすれば、非常によく分かる。つまり、このコアメンバー会議の場で歴史的なトレースをする、歴史的な再評価をするというのは、違うという感じがする。

- ・ しかし、その認識を持てば、例えば青森の場合も、先ほど座長報告の中にもこういうことを入れてくれと発言したのはそういう認識があったからで、そこでトレースの精神は入ることになる。座長報告として振り返って、青森の位置づけというようなものが、原子力政策の中で出てくる。それはトレース作業の一部だろうと思う。

(木元座長)

- ・ 冒頭 10～15分の座長報告が、実は1つのトレースである。

(中村委員)

- ・ 最終的に、それが日本の原子力政策全体がどうあるべきかというトレースにつながっていくというのは、最終的な目標だが、これは私は原子力委員会がやる仕事だろうと思う。我々も実際に市民の声を聞く中で、その認識を持ってやるということについては、賛成する。そういう感じでいけると、吉岡委員、よろしいのではないか。

(吉岡委員)

- ・ そう思う。

(木元座長)

- ・ ありがとうございます。

(松田委員)

- ・ 私は、いよいよその時期に成熟してきたかなという感じがする。コアメンバー会議の最初の立ち上がりの段階では、何をしたいかわからなくて議論をしていたわけだが、ここへ来て、成果を見ながら考えてきて、今年度は青森が3回目になるが、来年度からは、もう少し数をふやしながら、国民が今、何を知りたいか、知りたがっているかということを経験しながら、それを原子力委員会に伝えていく役割をコアメンバーが担っていくと良いと思う。
- ・ そのときに、私たちコアメンバーの中でも原子力についてよく知っている人も知らない人もいるから、コアメンバー自身が、原子力政策のあり方というものをトレースして振り返りながら再認識して行って、そこでまた将来を考えていく作業を一緒にしましょう、ということで国民の参加を得ていくという作り方をしていけば、すごく良い会になると思う。
- ・ ヨーロッパでは、こういうことは10年くらい前からあるやり方だから、日本でもそれをやれる技量がある人がいるかいないかの話だったことになる。それがこのコアメンバーの中に、スタッフとしてそろったということ、また、市民の側にもそれだけの期待感が高まってきたということではないだろうか。
- ・ 吉岡委員、中村委員、木元座長の話聞き、来年はそういったことを是非やりたいということを報告として書き込んでいくことが大事だと思った。

(木元座長)

- ・ 今おっしゃったことは、原子力委員会への報告の中に、そういうような姿勢で今後も市民参加懇談会に取り組むということを入れるということが良いか。

(松田委員)

- ・ それを盛り込みたい。
- ・ ある意味では国民と原子力委員会の通訳の役割を私たちはしていくということ。それになおかつ、私たち自身も一緒に考えていきたい。

(木元座長)

- ・ 最初にこれを立ち上げたときの言葉をまた思い出しているのだが、パイプ役、通訳、そういうことなんですよ。

(松田委員)

- ・ はい。どちら側の意見もきちっと公平に判断できる機関というのを我々が担うということで、非常に大変な役割を担うことになる。私は、国民のサイドとしては、歴史家になる必要はなく、歴史家が参加することが必要なものであって、国民は感性の中で、日本の国のために発言して良いと思う。

(木元座長)

- ・ ありがとうございます。結論を出すわけではなく、いただいた様々なご意見を踏まえながら、こういうことが言えるということ、今までやったことの中から得たものという形で報告の中に盛り込む、ということによろしいか。

(小川委員)

- ・ お話を伺って、自分自身の言いたいことがクリアになって来たように思う。もう既にトレース作業に入れる材料があるということ。

(木元座長)

- ・ 私は原子力委員になったときから、常に自分の中でトレースしている。日本はなぜ原子力なのか。なぜ核燃料サイクルなのか。自分に問わなければ、お話なんかできないと思う。それを原子力委員会に再度申し上げることも可能だろうし、国民に問うからには常に自分に問うということである。そういうものは、得たものとして報告の中に入れたいと思う。
- ・ 次に、今後どういうことを検討事項に盛り込んでいったら良いか、具体的に、今後こういうことをやった方が良いということはあるか。

(松田委員)

- ・ 私たちもやりながらトレーニングを重ねているので、来年はもう少し数を増やしたいと思う。

(木元座長)

- ・ それはコアメンバー会議の数を増やすということか。

(松田委員)

- ・ 内閣府の肩書きの中で、コアメンバーとして外へ出て行って、地域の皆さんと話し合うという、市民との対話の場を持って一緒に学び合うことを増やしたい。これだけのコアメンバーの方が行くと、東京から来たということで、結構話し合いたい人はたくさんいると思う。

(木元座長)

- ・ 私は必ず地元の方をお願いしたいと思っているので、今回、弘前市在住の芦野氏に入っている。

(松田委員)

- ・ もちろん主役は地元の方たちで、私たちは勉強している仲間としてそこに参加させ

ていただく。

(木元座長)

- ・ 承る立場である。

(松田委員)

- ・ ある種の仲間だと思う。

(木元座長)

- ・ 具体的にコアメンバー会議で取り上げたい事項はあるか。資料 8-2 号に「コアメンバー会議での議論を行う事項」とある。

(松田委員)

- ・ 余り難しいことはテーマとして挙げなくて良いと思うので、例えば、「基本的にエネルギーに対してあなたはどのように考えますか」というようなテーマが良いのではないか。その中で、核燃料の話なんかは入ってくると思うが、日本のエネルギー政策をどうするのかということ。

(木元座長)

- ・ コアメンバー会議でもテーマとすることか。

(松田委員)

- ・ 皆さんの判断によっては、取り上げて良いと思う。

(中村委員)

- ・ プラグマティック(pragmatic、实际的)に言うと、コアメンバー会議で議論するのが目的ではないと思う。市民参加懇談会をなるべくたくさん開くということが前提である。市民参加懇談会を開くために、コアメンバー会議をやるという形の方が良い。その中でテーマを決めていけば良いのではないか。そうすることでリクエストも出てくると思う。例えば、「今、九州でやる意味があるか」ということを議論する。「あるのなら、こういうテーマだろう」。あるいは、「大阪でやる意味はあるか。大阪でやるのなら、何が知りたいか。広聴したいテーマは何だろう」という議論の仕方をしていった方が、实际的だし、カレントな話題も扱えるし、参加していただく人たちの参加意欲も高くなるように思う。先にコアメンバー会議の議論ありきで、我々が色々なことを議論するのが先にあるよりも、とにかく市民参加懇談会をやろう、どこでやろうというところから、何をやろうというみんなの問題意識を出し合う場に、コアメンバー会議をしていく形が良いと思う。

(碧海委員)

- ・ 中村委員の意見と重なると思うが、コアメンバー会議が、今日も多少やっているような市民参加懇談会の技術的な検討だけで終わったのでは、もったいないと思う。今回の青森を入れれば 4 回になる実績から、市民参加懇談会というものをやると、こういうご意見が出てくるのではないかとか、今までの 4 回の中から仮説的なものを拾い出してはどうか。発言者というのは大体こういうふうになるだろうとか、こういうタイプの人が出てくるだろうとか、色々なことが今までの 4 回の中にあると思う。そういうものをある程度は押さえて、その仮説が果たして正しいのかどうかという議論もした方が良いのではないのかと思う。
- ・ 今までの 3 回は個別にまとめられているが、4 回終わったら、4 回を通じての問題提起をやっておいた方が良いのではないかと思う。

- ・ 市民参加懇談会には、4回通じるとパネリストがたくさん出ていらっしゃり、そのご発言には結構時間をとっている。その後の参加市民の皆様とのやりとりにしても、パネリストが絡む部分というのが結構多い。だから、純粹に市民の声を聞く部分というのは、必ずしも十分ではないのかもしれないと思う。前回も、そういう感じを受けた。そういうことをこのコアメンバー会議でも、議論してほしいと思っている。

(木元座長)

- ・ それは具体的にはどういう議論を考えているのか。

(碧海委員)

- ・ 市民参加懇談会というものが成功するとしたら、それは一体どういうことをもって成功だと思うのか、どういう点は成功ではないと思うのかというあたりを、検討した方が良いと思う。

(木元座長)

- ・ 今おっしゃったように、何をもって成功と言えるか言えないかという部分がある。いつか申し上げたように、「あくまでも走りながらやっている」が、その中で、「これはやってよかった」、「これを原子力委員会に言わなければ」というのが必ずつかめらるだろうと思っている。今のところ、少しはつかんでいる感触がある。そういうものを確実なものにしていく作業を、コアメンバー会議でもう少し議論してもいいのではないかと、そういうふうに解釈してよいか。

(碧海委員)

- ・ コアメンバーの中では、相当意見が違うわけだから、市民の考えていることをある程度予想するという部分にも、相当なずれがあると思うのです。

(井上委員)

- ・ 私も1年間参加させていただいて、地域に出かけていったときに、私が地元にいる人間として、この市民参加懇談会に参加したとしたら、「よくわかった」「なるほどいろいろ正確な情報ももらった」と感じ、考えることもたくさん出てきて、自分たちの軌道修正もしていくと思う。しかし、2時間、3時間の懇談会が終わって、えてして、それっきりということだと思う。地域ではかなりキーパーソンである、情報がほしい人、もしくは非常に関心のある人が興味を持って集まってこられるのだから、市民参加懇談会は、1つのきっかけづくりだと思う。非常に垣根を低くして、取っ払って、みんなで考えましようということをしてそこで実践していく3時間だと思う。
- ・ その後も、集まった人たちへ継続して情報が流れていくようにできないかと思う。場合によっては、自治体もお入りになるなり、フロアにいらっしゃるとするならば、そういう方たちも含め、垣根を取っ払った情報交換のできる人が200人とか500人とかいるわけだから、この人たちを捨て置く手はないと思う。その人たちによって、その後、地域版の市民参加懇談会というようなものがそこで生まれるならば、それは成果だと思う。市民参加懇談会の県民版又は地域版というような形で情報を流す場ができるようなら、本当の意味で身近な情報が、参加した方たちに入っていくのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ 市民参加懇談会に、200人なら200人参加していただいたら、その後、参加してい

ただいた方たちがコアになって、その地域で情報交換なり、討論会なりを実施していただくということか。

(井上委員)

- ・ そういうものに手を挙げる人がいるかもしれないし、そういう方たちに情報を継続して差し上げることで、言わば、点が面になるのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ 例えば、参加した方々を大事にして、知りたい情報となるものがあつたとすれば、その方たちにお送りするというような形をお考えか。今はインターネットでホームページにアクセスしてくださればという言い方もあるかもしれないが、ペーパーが欲しいという方もいらっしゃるかもしれない。そういう方には積極的にお送りするというのを市民参加懇談会がやっても良いのではないか、ということか。

(井上委員)

- ・ 色々な地域に行ったとしても、今のままでは点だと思う。面に広げていく、すなわち、次のステップの広がりを持つことが、市民を巻き込んで一緒に考えようという一番大きな意味ではないかという気がする。

(木元座長)

- ・ そう思う。それは多分、電気事業者とか国でもやっていることだが、改めて我々が開拓した、あるいは我々の集まりに来てくださった方に、メッセージを送っていただくということだと思う。

(井上委員)

- ・ 事務作業は大変だと思うが。

(中村委員)

- ・ それは、必ずしも市民参加懇談会がやる使命かどうかということを考えなくてはいけない。つまり、市民参加懇談会がやる必要があるかどうかということだ。そういうことが必要であることはよく分かるが、市民参加懇談会としては、こういう形で、こういうところにこういう情報を流すと浸透しますよということをアドバイスするのが役割ではないかと思う。
- ・ 経産省なり、保安院なり、あるいは事業者なりに、「どうもこういうことですよ、みんなが知りたがっているのは」あるいは「みんなが不満に思っているのは、こういうことなんです」と、原子力委員会も含めて、そういうところに橋渡しするのが私たちの仕事である。私たちから情報送りますよ、というのは少し違うように思う。

(井上委員)

- ・ ワンステップ、ツーステップというか、階段1つ2つだと思う。つまり、私たちでこういうことをやったことを、例えば行政の方がつないでいってくださるのか、事業者がつないでいってくださるのか分からないが、当然私たちがダイレクトにやるとは思っていない。

(木元座長)

- ・ 井上委員がおっしゃったことで私もすごく感じているが、やりっぱなしが一番困る。やりっぱなしになっている部分はフォローしていかなければいけない。それは市民参加懇談会の責任の範囲の中であるから、中村委員がおっしゃった橋渡しの部分、

井上委員がおっしゃったパイプ役、通訳という部分、そのパイプ役として、「ここに行くと言ってもらえますよ」と伝えるとか、もらってくださいと言われれば、もらって差し上げる、そういう方向でもいいのかもしれない。

(井上委員)

- ・ダイレクトでなくても、手法はいろいろあると思う。やはり、点から面へ広げる方法を問うということがどうしても必要である。

(木元座長)

- ・やりっぱなしはやめたいと思う。

(渡辺補佐)

- ・先生方のお話に対し少し補足させていただく。そのパイプ役を果たすために市民参加懇談会の窓口を常設にし、インターネットのホームページにも設置しているわけである。ただ、これまで開催した市民との懇談の場では、窓口を常設していることをアピールしていなかったため、今回、知りたいと思った方が会場にいらっしまったとすれば、私たちが常時窓口として、問題の提起や、情報の提供についてのご要望を承るということをもう少しアピールさせていただいてもいいのかもしれない。いただいたご要望などから、もっと情報提供をしてくださいというように市民懇から行政にお伝えすることもあるだろうと思う。また、皆さんからの声が多くあればという前提だが、市民懇自体から情報を何か発信していくといったような次の活動につながるようなことも出てくるだろうと思う。皆さんが皆さんインターネットを使えるというわけではないが、この常設の窓口を1つの手段として、積極的にご紹介をしていくという方法もあるのではないかなと思う。
- ・碧海委員がおっしゃられた、井上委員の前のご発言のことだが、もう少し内容を確認させていただきたい。「発言者というのは大体こういうふうになるだろう」といったような仮説的なものを拾い出すというお話だったが、会場では必ず先ほど吉岡委員がおっしゃったような、安全論とか技術論に関する質問が当然出てくる。市民の声を聞くということを前提にしたときに、そういった質問にどういうふうに対応するか。どのようにコアメンバーとして受け取って、それを返していくかというマニュアルという言葉は私は余り好きではないが、市民参加懇談会の持ち方としてどのようにしたらいいかということをもう少し深めてご議論いただく、そういうようなイメージと理解してよろしいか。

(碧海委員)

- ・今までは実施した後でそれぞれ反省をしている。その辺のところを、年度の変わり目に、また、4回開催したところで、少しまとめてもいいのかなと思う。

(吉岡委員)

- ・通訳という言葉は非常にいいと思うので、そこから始めさせていただく。私事だが、80年代の半ばに諸科学言語の変換文法という研究会を3～4年やり、佐和隆光氏が事務局長だったが、偉い先生が京都を中心に何人も来た。私が言いたいことは、諸科学言語の分野があらゆる分野にまたがるということで、その中で異なる言語の者が理解をし合う。それは当然、多言語を理解しなければいけないということである。通訳は多言語を操らなければいけない。2つの言語ではない。これは社会学の連中がよく言うことだが、フレーミング、つまり問題を認識するための枠取りはか

なり多様であって、コミュニケーションをとるためには、フレーミングの多様性を互いに理解しつつすり合わせをやっていくという作業が必要である。そうした観点から諸科学言語の変換文法のモデル構築を目指していた。そのうちに仲よし会になって解散してしまった。

- ・ 恐らく原子力政策についての政府の言語というのは、それに同意しない人から見れば、非常に一面的なフレーミングであると認識されているわけであり、それならほかのフレーミングというのはどういうものがあるのかということについての丁寧な分析を我々がやりつつ、典型的な幾つかのパターンぐらいいまで取り出して、それぞれの問題点、もちろん政府のフレーミングの問題点も含めてだが、そういうすり合わせを中心にやっていくということが市民参加懇談会の長所を出す1つの道かなと思う。技術的な安全論で論争し合うのではなくて、安全性についてのリスクというのは、どういう意味体系の中で危ないと見られているのかを理解する。
- ・ 今までのやり方だと、賛成論、反対論を並べて、単語や1行ぐらいのぶち切りにして並べるということをやっていたから、これでは合意が成り立ちようがないので、文法の構造までさかのぼって認識を進める。かなり高度なことを言っているが、先ほど歴史的アセスメントが、木元理論では、できる範囲でやればよいというふうに言われたけれども、まさにそのとおりで、そういうフレーミング解析をできる範囲ですということである。

(木元座長)

- ・ ここだから若干わかるけれども、一般的にはフレーミングの解析と言われても分からないと思う。さっき私が言った、イエスでもバットがある、ノーでもバットがある。そのバットの部分、ファジーな部分で共有できて、そこで共通言語が、可能であるという解釈もできると思う。そういう精神を織り込んで、我々はパイプ役、通訳として動いていきたいので、よろしく願います。
- ・ 共催ということについて確認したいが、刈羽で開催したときに、現地の諸団体と共催するという形をとった。そのように共催を望むところもあるし、今回の青森のように、共催団体は特にないということもある。形式にはこだわらないということとしたい。
- ・ 次に、実は柏崎での開催を検討している際に柏崎から来た話だが、市民参加懇談会には参加したいが、オープンになるから嫌だという方がいらっしゃる。公開でなければ、幾らでも意見を言いたいという。碧海委員も、小川委員もご存じかもしれないが、ビスコンティー氏が来日したときに開催した、クローズドの会があった。そのときにすごい意見がたくさん出たと聞いている。私たちが知り得ない意見が出ているらしい。そういうことも、ある時期には必要なのかなという気はしないでもない。

(小川委員)

- ・ 私は、市民参加懇談会の初期の頃に、テーブルトーク方式でやるべきだと主張したが、このままずっと10回、15回と、前回のパターン一つでやるのは良くないと思う。分科会方式でやるのか、テーブル方式でやるのか分からないが、場合によっては、クローズドというのも良いかもしれないと思った。ポイントとしては、このワンパターンですとっていくのではなく、幾つかの形態をとり得る力を、コア

メンバーとしてもつけるべきではないかと思う。

(木元座長)

- ・ テーマとか場所とか、何かある事件が起きたとか、そういうことによって形態は変わると思う。今は、とにかく皆さん方のご意見を聞くという「広聴」が主になっているから、第1部・第2部という形である。しかし、まだ2回目である。これは固まったわけではないから、フレキシブルに、柔軟に、また良い案があったらやりたい。ただ、非公開の方式だけは気になっている。非公開なら出席して話すという人が多いということが。

(碧海委員)

- ・ 私は原則として反対である。

(中村委員)

- ・ よほど何か具体的なケースに応じて熱望されれば、非公開でも聞くという姿勢は必要だと思うが、基本的にはやっぱりオープンな中で、「みんなで意見を言い合いましょ。それをちゃんと聞きますよ」というのが市民参加懇談会としての基本姿勢だと思う。
- ・ 小川委員が言うほどバリエーションを持たせられる状況にはまだないと思う。このワンパターンがかなりいけそうだと思えてきたのも、ごく最近の話で、1年かかっているわけだから。開催地によっても違うと思う。

(小川委員)

- ・ イメージとしては、ほかのいろいろなシンポジウムとも同じだと思う。

(中村委員)

- ・ それを、それこそフレームというか、枠組みだけでとらえるか、中身も考えてとらえるかの違いが出てくる。

(木元座長)

- ・ 形態は独自だと思う。第2部にシナリオも何もないというのは初めてのはずである。それだけこちらは怖い。しかし、それをあえてやろうというのは、市民参加だからである。

(中村委員)

- ・ とりあえず来年度も、今のところのベストと思われる方法で、なるべく色々なところでやるべきだと思う。色々なところというのは、先ほどの歴史的なトレースの意味合いもあるが、特に原子力関連立地の皆さんと一緒にやることは非常に大事であるのは確かだが、もう1つ、いわゆる消費地というか、その他の人々、ほとんどの日本人といっても良いが、この人たちにも違う意味で歴史的なとらえ方というのを出していくというのはすごく大事である。なぜなら、原子燃料サイクルであろうが、なかろうが、ほとんどの人は関心を持ってないと思うからである。
- ・ まとめると、なるべく回数をやることと、開催地も原子力関連立地、あるいはその周辺地はもちろんだが、中核都市となる消費地、大きな都市での開催というのでも必要だと思う。

(碧海委員)

- ・ 賛成である。

(木元座長)

- ・きのう、熊本でもそういう声が出た。熊本では原子力発電はないけれども、九州電力としては、やっている。熊本も原子力発電による電気を使っている。もし熊本で開催するとしたら、どういう反応を示すかが話題になった。なぜ原子力発電かを議論する場がないと言う。そういう場を市民参加懇談会で持てるのですかと聞かれた。私は諮りますけれども、持てないということも言えないし、持てるだろうとも思うというような妙な言い方をした。

(中村委員)

- ・市民懇というものが存在して、活動するということが、そういう要望なり、可能性なりを実現する初めてのきっかけといたらいいのか、そういうものなのだと思う。だから、もし、私たちの町に原子力関連施設が来たらというテーマでやりたいんだというご希望があれば、今、それに応えられるところはない。例えば、非核平和宣言をするようなところなら、もし私たちの村に原子力施設が来たらということを議論しませんかと行政に言っても、そんなのは聞いてくれないだろうと思う。そういう声にも応えられるものが、実はここにあるよというのは、かなり大事なことだと思っている。

(木元座長)

- ・そのこのところで、共催の話がまた来ると思う。

(中村委員)

- ・最初、刈羽のときは、我々も全く五里霧中で、やってみなければ分からないところがあったので、共催の件については共通認識として、相当反省があると思うが、今は共催というケースもあっていいぐらいになってきたのではないか。積極的に皆さんの声を聞きに行きますからというアピールの仕方の方が、大事なような気がしている。当初、基本的に地元と共催したいという方針で始めてみたが、どうしても共催でやりたいという要望に対しては検討するとしても、どうも余りこだわらない方がいいように思えてきた。

(木元座長)

- ・では、共催もありで、そうでない場合もありということとしたい。
- ・それからまた、非公開という話をしたが、原則公開としたい。もし、非公開ならば、それは個人的、あるいは原子力委員会の窓口、市民懇の窓口がお聞きしてもいいだろうというレベルで、今、とどめておきたい。非公開による開催を求める声が大きくなったときに、また検討したい。

(碧海委員)

- ・非公開ならこういうことを言いたいというのは、こういうことを言った結果が非公開ということか。

(木元座長)

- ・そういうことである。
- ・匿名で言いたい放題言うというのは余り好きではない。無責任と感ずるので、言うならちゃんと責任を持って言ってほしい。

(碧海委員)

- ・その地域で自分たちの地域をよくしようと思うのなら、公開で発言すべきである。

(木元座長)

- ・ ただし、ある地域の女性の方たちから、顔を出して、言いたいことを正々堂々と言う勇氣はあるが、その後、暮らしにくくなる、だから非公開で言わせていたきたいという声も実はある。そういう風土というか……。

(中村委員)

- ・ その方たちのおっしゃる非公開が、匿名とするだけで良いのか、とにかく一切公表できないということなのか、発言者を特定しない形で出すというぐらいまでは譲歩できるのか、といったことによってもこちらの対応が違ってくるとは思う。

(木元座長)

- ・ この間のビスコンティー氏の会では、記録も一切公開していない。

(中村委員)

- ・ その場合、我々としては受けられないのではないか。

(小川委員)

- ・ 何もフィードバックできないことになる。

(木元座長)

- ・ 本日の終了時刻が近づいてきた。今後のこととして、今、いろいろ伺った意見を、事務局の方でまとめて、ファックス等でお知らせする。
- ・ 3月15日、「市民参加懇談会 in 青森」に使う資料についても、作成して、皆様にまたお諮りする形でファックスを送らせていただくので、お忙しいところ、大変恐縮だが、ご意見を早目にお寄せいただければ、大変ありがたいということで、よろしく願いしたいと思う。

(3) その他

(中村委員)

- ・ 新年度、4月1日から始まって、最短で、市民参加懇談会を開催できるとしたら、いつ頃か。4月中にも開催可能か。あるいは5月の連休明けぐらいはいかがか。

(木元座長)

- ・ すぐやろうと思えばできると思う。

(犬塚補佐)

- ・ そこに制約はなく、日程の調整、物理的な調整の方が問題になるかと思う。

(中村委員)

- ・ 新年度が始まった途端は大体何もなくて、2月3月になって急に増えるというようなことを、何とかしなくてはいけないという感じもしている。ほかの色々なことは大体6、7月ぐらいから立ち上がってくる。ならば、新年度、4月末とか5月とかに市民参加懇談会は始まってもいいかなと思う。

(木元座長)

- ・ 検討したい。これだけ盛り上がっているときに、続けてやった方が良くとも思う。

(中村委員)

- ・ はっきり申し上げると、本当に4月5月はほかの省庁もこのような会は何もやらないように思う。だから、4月5月にやると、非常に差別化ができる。ほかの大体のパターンは、始まったと思ったら、みんな夏休みになり、9月以降にまた集

中するというもの。

(木元座長)

- ・ 大変いいご意見をたくさんいただきまして、ありがとうございました。

本日の議論を踏まえて、事務局にて資料 8-2 号に関する事項をまとめ、後日、F A X 等で各委員にお送りすることとし、次回のコアメンバー会議でも引き続き議論することとなった。

以 上